



## 幼児と天文学

森 下 博 三

「うわあー、すごいやん、あれはなんという山なの。きつきの  
ピコよりずっと大きいやん」

「僕にも見せろよ、兄ちゃんずるいや、僕よりずっと長く見て  
るんだから。はやく僕も見たいよ」

「待てよ、もう少しだよ……」

昨年、ボール紙細工で簡単に作り上げた、六〇〇ミリの望遠鏡  
をベランダの手すりにくくりつけて、月面観察をはじめたときの  
わが家の風景である。長男は小学二年生、次男は満五歳。

のぞきを交替したところで、どの程度の天体に対しての興味を  
もっているのか、テストしてみたくなった。

「兎が長いキネでお餅ついてなかったかい」

長「あれはオトギ話だよ、そんなもの住んでるわけがないよ」

「どうしてん、だってお父さんはそう教わったんだがな」

長「だって月には空気がないから、生きものは生きておれないじ  
ゃないか」

「ふうん、じゃあ人間が月世界に旅行するときは、どうするん  
だい」

長「それは宇宙服を着ていくんだよ」

「そんな服着てたら、歩いたり走ったりしにくいだろうな」

長「そんなことないよ。月では重力が小さいから、ビヨンとジャ  
ンプしても、地球より高く飛べるんだから、そうだ重力は地球の  
六分の一なんだよ」

「ほほう、重力は六分の一なの、それは具合がいいや。じゃ





